

幼少期に中国と日本を往還した若者のアイデンティティの共通点と多様性

－アイデンティティ葛藤とその解決方略に焦点を当てて－

藤越 (東京大学大学院生)

1. はじめに

グローバル化に伴い、幼少期より複数の国を移動しながら成長する経験を持つ若者が増加している。彼らのアイデンティティについては、多様で変化し続け、その過程で多くの葛藤が生じることが指摘されている。それらの先行研究では、主に、英語圏に関わる移動 (Kanno, 2003; Ford, 2009; 額賀, 2013 など)、あるいは、移住先の国で定住する場合 (人見・上原, 2018; 坪田, 2018 など) を研究対象としているが、「中国に生まれ、幼少期に日本に移動し、数年間の滞在後中国に戻る」タイプの移動についての研究は、その規模を考慮すると十分ではない。また、ケーススタディにとどまらない事例間の比較が不足しており、さらに、幼少期の移動が成人後の彼らにもたらす影響についてもさらなる検討が必要である。

本研究では、「中国に生まれ、幼少期に日本に移動し、数年間滞在後中国に戻る」移動を経験した若者 (以下、「幼少期に中国と日本を往還した若者」) を対象とし、(1)彼らのアイデンティティ変化の概要を示し、どのような共通点と多様性があるか、そして(2)彼らがどのようなアイデンティティの葛藤を経験し、どのような解決方略を取っているかを示すことを目的とする。

2. 理論的枠組

本節では、本研究の研究対象である「アイデンティティ」について説明する。本研究では、Weedon (2004), Norton (2013) をもとに、アイデンティティを「世界や他者との相互作用の中で構築される、自分自身が何者であるかについての一時的で流動的な認識」と定義する。分析の際には、Block (2006) で指摘されている 6 種のアイデンティティから、本研究のデータ収集に用いたインタビュー (詳細は 3 節) で特に関連する言及が多かった、「ナショナルアイデンティティ」と「言語アイデンティティ」の 2 つを検討する。なお、Block (2006: 37) を参考に、それぞれを以下のように定義する：

ナショナルアイデンティティ：国民国家に帰属する歴史・祖先・信念・宗教などの要因を考慮したうえで、自身がどの国に対して帰属感や親近感を覚えるかについての認識

言語アイデンティティ：自分がどの言語を得意とし、どの言語に親近感や自分らしさを覚えるかについての認識

また、先行研究では幼少期の移動が成人後の彼らにもたらす影響についての検討が不十分であることを鑑み、移動の経験とその後の職業選択との関係性にも目を向ける。

3. 研究協力者及び研究方法

本研究の協力者は、「幼少期に中国と日本を往還した若者」4名である。表1にプロフィールを示す。

表1 研究協力者のプロフィール (インタビュー時点)¹

仮名	年齢	性別	日本滞在時の年齢 (幼少期)	職業	現住地	成人後の国の移動経験 (国: 年齢)	インタビュー使用言語
トーマス	29	男	6-11	大学院生 ¹⁾	日本	アメリカ: 19-27; 日本: 29-	中国語
ヤオ	32	女	7-13	ポスドク研究員	日本	日本: 24-	日本語
ヒトエ	32	女	8-15	アーティスト (画家)	中国	アメリカ: 24-28	日本語
キヨ	34	女	6-10	大学院生 ¹⁾	中国/日本 ²⁾	日本: 24-	日本語

1) 社会人経験あり 2) 日本の大学院に在籍しているがコロナ禍で中国に一時帰国中

データ収集は、半構造化インタビュー (2020年12月から2021年1月にZOOMで実施、1名につき平均2.4時間) を通じて行った。インタビューの主な質問項目は、幼少期の移動の過程での経験や重要なイベント、言語能力・言語使用や

¹ 幼少期の日本滞在理由は4名共に両親の留学・研究である。また、4名共に滞在時は日本の一条校に通っていた。

言語への態度の変化、移動によって得た資本や困難、成人後の国の移動の経験、職業選択及びその理由である。

収集したデータは、すべて文字化し、オープン・コーディング（佐藤, 2008; サトウ・春日・神崎, 2019）の手法で分析した。研究の目的と紙幅を鑑み、以下では「ナショナルアイデンティティ」「言語アイデンティティ」「移動の経験とその後の職業選択との関連性」「アイデンティティ葛藤」に関連するラベルを付したデータを中心に提示する。

4. 分析結果

本節では、3節に示した分析の結果について、協力者のアイデンティティ変化の全体像を示し、4.1節で4名の共通点、4.2節でその多様性について論じる。4.3節では、アイデンティティ変化の過程で生じた葛藤やその解決方略について例示する。必要に応じ、インタビューの断片を掲示する。

4.1 アイデンティティ変化における共通点

アイデンティティ変化における共通点は、ナショナルアイデンティティと言語アイデンティティの面で、幼少期の日本滞在時や中国への帰国直後の期間に見られた。

ナショナルアイデンティティの面では、4名の協力者は共通して、幼少期の日本滞在時は自身と周囲の違いに敏感であり、マジョリティである「日本」への同化を志向し、自らや家族の「中国人らしさ」に反発的な態度をとる傾向があった。言語アイデンティティの面でも、自身や両親が中国語を使うことに対して反発的な態度を持つことが多かった。それに伴い、言語能力・言語使用の面でも、幼少期の日本滞在時には日本語能力の上昇と同時に中国語能力が低下し、中国語の使用範囲も家庭内にとどまった（家庭内での言語使用も、両親が中国語を使用するのに対し、協力者本人は日本語で返答することが多い）。さらに、日本滞在を終え、中国へ帰国した直後の期間には、学校における教育方式や制度の違いや、言語能力上のハンディによって、適応過程で多くの困難に直面し、アイデンティティの揺らぎを経験することがあった。

4.2 アイデンティティ変化における多様性

中国への帰国直後以降は、協力者間でアイデンティティの多様性が目立った。4名の協力者の「ナショナルアイデンティティ」「言語アイデンティティ」「移動の経験と職業選択との関係」の3つの項目について、主な特徴を表2に示す。

表2 中国への帰国直後以降の協力者のアイデンティティの主な特徴

仮名	ナショナルアイデンティティ	言語アイデンティティ	移動の経験と職業選択との関係
トーマス	中国人らしさが勝る	中国語を話すときが自分らしい; 「日本語が上手」と言われることで中国の友人と距離ができる危惧	将来的には中国で働きたい
ヤオ	日本人らしさが勝る	日本語を話すときが自分らしい 自身の中国語能力への劣等感	このまま日本で働きたい
ヒトエ	アジア人である	中国語を話すときが自分らしい 日本語によるコミュニケーションの幅の広がり	創作活動にアジアのシンボルや 日本での思い出を用いる
キヨ	中国人らしさと 日本人らしさを併せ持つ	中国語・日本語をスイッチすることへの無抵抗 中国語・日本語どちらも完ぺきではない	日本で中国語教師の経験がある 将来は中国で日本語教師になりたい

表2が示すように、中国への帰国直後以降のアイデンティティは、4名の協力者で大きく異なるが、表2の3つの項目間には関連性があるようである。多様性の発生要因の1つとして、以下では、「家族・友人・教師などの、協力者の移動の経験や滞在していた国（日本）への態度」が、アイデンティティ形成にどのように関わっているかを検討する。

まず、トーマスの事例について見てみたい。彼はインタビューの中で、自身の「中国人らしさ」を強調した。そのナショナルアイデンティティ形成にかかわるエピソードとして、帰国直後に、クラスメイトが彼の移動の経験に対し、友好的な態度をとったことを挙げる。トーマスは帰国時に、「日本から帰ってきたことにより仲間外れにされるかもしれない」と危惧していたが、その予想に反して、彼の経験を知ったクラスメイトは移動の経験に興味を示し、フレンドリーな態度で彼に接した。そこからクラスの輪に入り、うまく適応することで、自身の「中国人らしさ」が上昇したという。トーマスは大学生の時にアメリカ留学を経験し、アメリカで出会った日本人留学生にも自身の幼少期の経験を説明したが、取り立てて興味を示されることはなく、トーマスも彼らに特別な親近感を抱くことはなかったようだ。

次にヤオの事例について説明する。ヤオはインタビューで自身の「日本人らしさ」を強調した。彼女は帰国後もトーマスのようにうまく中国の学校に馴染めず、大学生のころには日本への留学を計画した。大学院進学時に来日し、幼少期

に培った日本語能力ですぐに研究室に馴染んだ彼女に対し、周りの中国人留学生の反応は友好的とは程遠く、「敵視」に近い態度であった。その態度が自身と「中国人」との間に決定的な距離を生み、「日本人らしさ」が強化されたという。

次に、ヒトエの事例について説明する。ヒトエは中国への帰国後、学校で日本製品不買運動を経験することでアイデンティティの葛藤を経験するが（詳細は 4.3 節）、その後、自身と同様にアーティストを志し、かつ日本に対しても興味を持ち、友好的な態度をとる友人たちと出会い、馴染むことで「中国人らしさ」が増したという。彼女は大学院でアメリカ留学を経験するが、アメリカでの教師による「文化的ルーツを創作活動で大事にすべき」という指導も相まって、「アジア人」としてのアイデンティティを意識し、それを創作活動に用いるようになったという。

最後に、キヨの事例について説明する。キヨは中国への帰国後、次第に中国の生活へ適応していく中でも、常に「いつか日本に行かなきゃ」と思っていた。大学院進学のために再度来日するが、その時の日本語は「子どもっぽい日本語」であり、大学院での研究のために日本語学習に努力を重ねた。しかし、周囲は彼女の移動の背景を知ると「日本語ができるのは当たり前」と思い、彼女の努力を軽視した（詳細は 4.3 節）。それを受け、キヨは幼少期の移動の経験を周囲に隠すようになる。その後、大学院の授業で「幼少期に国の移動を経験した人」に触れる機会があり、その時の研究仲間が「国の移動を経験した人」の困難・葛藤・努力への理解が深いことを知り、ようやく自身の移動の経験やハイブリッドなアイデンティティと向き合い、積極的に自身の経験を語るようになったという。

以上のように、「幼少期に中国と日本を往還した若者」のアイデンティティは、特に日本での滞在を終え、帰国した後には個人差が生じやすい。このアイデンティティの多様性の背景には、彼らの移動の経験に対する、友人・教師などの他者の態度がかかわっており、肯定的な態度である場合は周囲のアイデンティティに近づいたり、自身のアイデンティティを認めたりする方向に変化し、否定的な態度である場合は周囲のアイデンティティから遠ざかったり、自身のアイデンティティを否定したりする方向に変化することが明らかになった。

4.3 アイデンティティ葛藤及び解決方略

本節では、協力者が経験したアイデンティティ葛藤及びその解決方略について、事例をもとに記述する。

まずは、ナショナルアイデンティティに関連するヒトエの事例である。4.1 節で述べた通り、4 名の協力者は幼少期の日本滞在時は日本への同化を志向する傾向があった。しかし、ヒトエが中国へ帰国したころは日中関係が冷え込んでおり、その余波が学校生活の中でも「日本製品不買運動」として現れ、ヒトエもクラスメイトから参加を求められる。以下の断片 1 は当時のエピソードに関するヒトエの語りである：

【断片 1 ヒトエ 日本製品不買運動への不参加をめぐるクラスメイトの態度・クラスメイトへの敬遠】

（帰国後に学校で日本製品不買運動が発生し、参加を求めるサインリストがあったという話）。で、私はそれにはサインしなかったんですよ、なんか、馬鹿馬鹿しくて、自分の中で。それで、あの、サインしなかったことは責められなかったんだけど、代表の人が私のところに来て、なんか、すごく詳しく、私は日本人でないことを確認して、「あ、それならいいや」、みたいな、なんか、「日本人だったらもう話したくない」とか、そういうことを言われました。

（当時の気持ちは？）なんか、「何この人、変な人だな」とかって思いましたね。（中略）で、あの、私はもうその人たちとは関わらないようにしようって思っていました。

ヒトエはクラスでの日本製品不買運動に参加しなかったが、それによってクラスメイトに日本人ではないことを事細かに確認され、不快な思いをする。そして、クラスの中で日本製品不買運動に積極的に参加していたクラスメイトとのかかわりを避けるようになる（網掛け部分）。ここでは、この葛藤への解決方略を「回避」と呼ぶ。

次に、言語アイデンティティに関連するキヨの事例を説明する。前節でも述べた通り、キヨは大学院進学のための再来日の際、日本語学習に多大な努力を重ねた。しかし、周囲は彼女の幼少期の日本滞在経験を知ると、彼女の日本語学習への努力を蔑ろにした。その時の葛藤をキヨは以下の断片 2 のように語る。

【断片 2 キヨ 言語習得のための努力が軽視される苦しさ・移動の背景の非開示】²

また日本に来たばかりの時は、日本語ダメだったんですよ、書くのも、文法も。よかったのは発音だけ、あと、読解もギリギリって感じてました。でも、中には、「ああ、キヨちゃんができるのは、子どものころ（日本に）いたか

² 中国語でインタビューを実施した協力者の断片は筆者が和訳したものを提示する。下線部はインタビュー時に日本語で発話された。

らだよね」って言う人もいて、それがショックで、で、思ったんです、「じゃあ言わない方がいいや」って、「普通の中国人留学生」ってことにしようって、(中略) そうしたら自分の努力を蔑ろにされることもないわけなので。

キヨもヒトエと同じように、葛藤に直面した当初は「自分の移動の経験を言わない」という「回避」(網掛け部分)の解決方略をとる。しかしそれだけでなく、4.2 節で述べた通り、大学院の授業で「幼少期の国を越えた移動」について知識がある研究仲間と出会い、自らも関連する知識を蓄えることで自らの幼少期の国の移動について向き合うことができるようになる。キヨの2つ目の解決方略を「関連知識の獲得」と呼ぶ。

移動に関連するアイデンティティ葛藤は、職業選択の過程で顕在化することもある。ヤオはインタビュー時に転職活動をしており、その際に、日本国籍を持たないが故に、これまでに培ってきた知識・言語能力・学歴などの資本を十分に生かすことができない、という経験をしたという。ヤオは当時の葛藤について以下のように述べる(断片3)：

【断片3 ヤオ 外国籍であるが故に自身の教育や職業的資本を十分に活かせない】

なんか、いくら頑張っても、日本語もできて、英語もできて、博士を取ったとしても、日本人で、フリーターの人には敵わないなって、思っちゃうんですよね。だから、こう、頑張っても仕事見つけられないんですけど、まあコロナ禍っていうのもあるし、会社によっては、「あ、そのビザはちょっと嫌だな」とか、「永住権ならいいけど」っていう会社ももちろんいるって、転職の、あの、エージェントさんに聞いたので、なんか、そういうところではすごい不利だになって、いくら頑張っても、外国人は外国人なんだなあって思うんですよね。

以上の葛藤を経験しながらも、ヤオは転職活動を積極的に行い、より自身の資本を活かせる職に就くために日本での永住権を申請し、その後実際に永住権を取得したという。ヤオの葛藤への対処方法を「積極的な働きかけ」と呼ぶ。

このように、協力者は、移動の各段階で様々なアイデンティティ上の葛藤に直面する。これらの葛藤に対しては、回避、関連知識の獲得、積極的な働きかけ、など、異なる解決方略が取られていた。

5. おわりに

本研究では、「幼少期に中国と日本を往還した若者」のアイデンティティについて、(1)多様性が生じるのは中国への帰国以降で、他者による移動経験や滞在国への態度が多様性に影響していること；(2)移動の各段階で様々な葛藤に直面し、回避、関連知識の獲得、積極的な働きかけなど、異なる解決方略が取られていることを明らかにした。また、葛藤のエピソードには日中関係に起因するものがあり、日本と中国を移動した者の特殊性の一端を示した。

本稿では、「幼少期に中国と日本を往還した若者」のアイデンティティの概要を示し、アイデンティティに多様性が生じる原因の一つとして「他者の移動経験や滞在国への態度」を挙げたが、実際にはより多くの要因がかかわっていると考えられる。また、今回は協力者のナショナルアイデンティティを「中国人らしい」「日本人らしい」などのラベルで簡略化して説明したが、実際にはより複雑で、例えば、全体的な「中国人らしさ」の中にも「日本人らしい」部分があり、時と場合によって使い分ける、など、トランスナショナルな面(De Fina & Perrino, 2013)があることが分かっている。このような複雑性について、今後より細やかな分析を進めていきたい。

参考文献

- Block, David (2006). *Multilingual Identities in a Global City: London stories*. New York: Palgrave Macmillan.
- De Fina, Anna & Sabina Perrino (2013) Transnational Identities, *Applied Linguistics*, 34(5), 509–515
- Ford, Keith (2009). Critical Incidents in the Experiences of Japanese returnees. *Language and Intercultural Communication*, 9(2), 63–75.
- 人見美佳・上原龍彦(2018). 外国につながる子どものキャリアデザイン—「国」「ことば」の認識との関わりに着目して—。川上郁雄・三宅和子・岩崎典子(編) 移動とことば. pp.106–124. くろしお出版
- Kanno, Yasuko (2003). *Negotiating Bilingual and Bicultural Identities: Japanese Returnees betwixt Two Worlds*. New York: Routledge.
- Norton, Bonny (2013). *Identity and Language Learning: Extending the Conversation* (2nd.Ed). Bristol: Multilingual Matters.
- 額賀美紗子(2013). 越境する日本人家族と教育—「グローバル化能力」育成の葛藤—。勁草書房
- 佐藤郁哉(2008). 質的データ分析法—原理・方法・実践—。新曜社
- サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実(編) (2019). 質的研究法マッピング—特徴をつかみ、活用するために—。新曜社
- 坪田光平(2018). 中国系ニューカマー第二世代の親子関係とキャリア意識—トランスナショナルな社会空間に注目して—。国際教育評論 14, 1-18
- Weedon, Chris (2004). *Identity and Culture: Narratives of Difference and Belonging*. Maidenhead: McGraw-Hill Education.